

幼児のレジリエンス育成におけるタイの保育者の視点

サシラック・カヤンキジ

タイ・チュラロンコン大学教育学部

要旨

社会情動的スキルは幼児期に育成することが極めて重要である。こうしたソフトスキルは、健全な子どもの発達のための保護的要因であるレジリエンスを確立するための基礎となる。本研究では、保育者の「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という用語の理解と、4～6歳児のレジリエンスを育むために保育施設で行われている実践について調査した。オンラインによる詳細なインタビューの対象者として、非確率抽出法であるスノーボールサンプリングを用いてタイの保育者 11 名を選び、半構造化質問を用いたインタビューを行った。その逐語記録をもとに内容分析を行い、リサーチ・クエスチョンに対する回答データを生成した。回答データの結果、タイの保育者は、子どもが幸福で成功した人になるための重要なスキルとして、社会情動的スキルとレジリエンスを重視していることが判明した。保育者 11 名のうち 2 名は「レジリエンス」という言葉を聞いたことがなかったが、「社会情動的スキル」については全員がよく知っていた。社会情動的スキルは社会情動的な発達に関連するものとして、タイの 2017 年国家幼児教育カリキュラム(改訂第 2 版)に記述されている。社会情動的スキルとレジリエンスを育成する取り組みは、次の 3 つの側面から構成される: 1) 物理的環境: 居心地の良い家庭的な環境や広いプレイルームなど、2) 活動: 芸術的活動、マインドフルネス・トレーニング、7 つの習慣、実行機能、感情に関連した物語、自由遊び、音楽と運動、料理、感情カードを使った感情のチェックインとチェックアウト、感情日記、タイの伝統的なゲームやボードゲーム、自己評価ワークシートなど、3) 保育者による指導: 模範を示す、前向きな規律、クラスのルールづくり、適切なタスクの割り当て、感情を認識する方法の指導、個人／ペア／グループでの作業割り当て、バディ制度の採用など。

キーワード: 保育者、視点、レジリエンス、幼児

はじめに

将来の国民の質は0歳から8歳までの育児および幼児教育・保育(ECEC)の質によって決まる。タイの2021～2027年児童発達計画によると、幼児教育・保育(ECEC)のビジョンは、全ての子どもが潜在能力を最大限に発揮し、質の高い国民となるよう育成することである。この計画を実現するために提案された7つの戦略として、幼児向けサービスの提供、幼児のいる家族の子育て力強化、保育所の質の向上、幼児情報システムの開発と統合、幼児期関連の法令整備、研究開発の実施、手順・評価監視の管理・開発が挙げられる。このように、タイが目指す幼児のイメージは、身体、情動、規律、社会性、知性を含む全ての発達領域においてバランスの取れた子どもである。従って、就学前の0～6歳児を対象とした幼児教育・保育はウェルビーイング、教育、社会福祉に焦点を置く(教育委員会事務局(OEC)、2021)。

保健システム研究所(HSRI)は2017年に2～7歳児の30%に実行機能の遅れが見られると報告した。このことは、自己制御の欠如、注意散漫、集中力の低下、衝動性、怒りっぽいなどの行動上の問題につながる可能性がある。社会情動的スキルは実行機能に関連していることが知られている。すなわち、社会情動的スキルは脳機能に絡み、思考プロセスへと誘導する(HSRI、2017をPhromkat、2023で引用)。実行機能は学習や仕事で達成する一連のメンタル・プロセスである。理性的に思考する力、抑制制御、感情や行動を制御し、計画を立て、注意を払い、指示を記憶し、順番に作業する力は全て実行機能によるものである。従って、実行機能は目標を達成するために思考、感情、行動を制御する脳の力である(Pokam、2020)。その結果、タイ教育省(MOE)は、幼児教育・保育プログラムの有効性を向上させ、幼児の発達の遅れという問題に対処するために、実行機能を非常に重要視している。

2020年以降、タイ教育省は、0～8歳児全員の身体的、情動的、社会的、知的発達に自己教育と実行機能を追加して、バランスのとれた発達に重点を置いた幼児教育政策を発表している。幼児教育・保育プログラムに期待される成果とは、子どもが自尊心、自信、自己効力感、自己抑制を身に付けるように育てることである(MOE、2020)。

タイの教育委員会事務局(2022)によると、あらゆるレベルの学習者がコロナ禍の影響を受けたとしている。オンライン学習によってストレス、不安、集中力の低下、学習に対する関心や意欲の欠如、社会的スキルの低下が生じたからである。幼児の失われた学びを取り戻すための対策として、学習プロセスの再設計、子どもの潜在能力を引き出す保育者や園長のスキル育成、効果的な学びのための学校、家族、地域社会、関連セクターなどの関係者との連携、前向きな姿勢と心身のウェルビーイングの重視などが挙げられる。2024年2月、タイ教育省は、スクリーンタイム(デバイスを視聴する時間)の増加に伴い、育児の新たなキャンペーン「3つの促進、3つの削減、3つの増加」を提案した。この政策は、健康な幼児の発達を促進するための教育委員会事務局(OEC)の対策とも合致している。「3つの促進」では、保護者、保育者、地域社会の正しい理解の向上、児童福祉の適切な改善、地方自治体や地域社会の強化、「3つの削減」では、スクリーンタイムの50%削減、児童の幸福を取り戻すことによるストレスの削減、子どもに対する身体的および精神的な暴力の削減が挙げられている。一方、「3つの増加」では、音楽、スポーツ、体操など、幼児向けの遊びに基づく活動を増やす、物語の読み聞かせ時間を増やす、家族と過ごす時間の質を向上させることが提唱されている(MOE 360、2024)。

先行研究によると、生活の質や生活満足度は、前向きな感情だけでなくレジリエンスにも影響を与える(Cohn 他、2009)。Yoleri (2020)もまた、幼児のレジリエンスを育む上で大人が重要な役割を果たしていること、子どもの年齢、忍耐力、気質がレジリエンスの予測因子であると結論付けている。別の研究によると、年長の子どもは年少の子どもよりもレジリエンスが高いことが判明している(Miljević-Ridički 他 2017、Yoleri 2020)。

Pengping と Khayankij (2022)は、バンコクの未就学児のレジリエンスを促進する保育者の役割を研究し、保育者が高いレベルでレジリエンスを促進していることを確認している。「学びの環境の構築」に関しては、学びの管理よりも平均スコアが高かった。すなわち、保育者は、社会的スキルの指導、遊びの促し、学び支援よりも、自身が手本を示すこと(模範として優しく穏やかで、笑顔を絶やさず、ユーモアを見せるなど)、教室でのやりとり、クラス運営を重視して実践していた。しかし、レジリエンスの育成に関する知識と実践についての保育者の知識は、依然として不足していた。そのため、自分自身のレジリエンスを強化するためにスキルを向上させなければならず、かつ子どものレジリエンスをサポートするためのガイドラインも必要としていた。この研究で推奨されたのは、成功事例に基づいたレジリエンスに関する詳細な研究を実施し、子どもの将来的なウェルビーイングの基礎を築くことにつながるレジリエンス育成の重要性を保育者が認識するためのガイドラインとすることであった。

子どものレジリエンスを予測する 9 つの特性として、構造、結果、親子のつながり、堅固な人間関係、力強いアイデンティティ、自制心、帰属意識／文化／精神性／人生の目的、権利と責任、安全とサポートが挙げられる(Ungar, 2022)。レジリエンスが高い子どもは、深刻な問題や障害から精神的に回復する能力が高く、安全に成長し、発達する助けとなっている。レジリエンスは、家庭、社会、学校における環境や適切な保育・教育を通じて向上させることができる(Fenwick-Smith 他 2018、Las Hayas 他 2019、Pinto 他 2021)。また別の研究では、レジリエンスが前向きな感情と生活満足度の関係を仲介することも判明している(Cohn 他、2009)。

ソフトスキル、すなわち社会情動的スキルやレジリエンスは、子どもが将来成功するために、そしてBANI(脆弱性、不安、非線形、不可解さ)の世界や予測不能な状況で生き抜いていくために不可欠な性質という点で、重要である。先行研究では、子どものレジリエンスを強化することは、特にコロナ禍のような困難な時期においては、子どもの生活の質を向上させるために必要な手段であることを示唆している。最近では、幼児のレジリエンスを育成するプログラムやカリキュラムが数多く見られる(Fenwick-Smith 他 2018、Las Hayas 他 2019、Pinto 他 2021)。しかし、レジリエンスを育成するカリキュラムを効果的に実施するためには、保育者が知識を得て、レジリエンスの本質を真に理解することが重要になる。本研究は、レジリエンスの概念に対する保育者の視点と理解、および子どものレジリエンスを育み向上させる取り組みを調べることを目的としている。本研究ではさらに、子どもの将来的なウェルビーイングを決定する要因であるレジリエンスを育成するための効果的なガイドラインを得ることも目的とした。

調査方法

この定性研究では非確率抽出法であるスノーボールサンプリングを用い、私立保育園 6 か所と公立保育園 4 か所から 11 名の保育者をケーススタディとして招いた。また、有意抽出法を用い、保育者として最低 5 年の教育経験があること、最低 1 つの幼児教育資格を取得していること、修士号または学士号を取得していること、ヴァルドルフ＝シュタイナー教育、モンテッソーリ教育、ハイスコープ、プロジェクトアプローチなどの幼児教育アプローチを実践している私立保育園で働いていること、または先導的／ベストプラクティス実践園である公立保育園で働いていることなどの条件に基づいて選定した。

研究者は調査参加者に本研究の内容を説明し、個別のオンライン・インタビューを行ってデータを収集することについて承諾を得た。オンライン・インタビューの所要時間は約 1～1.5 時間、インタビュー中は動画と音声の両方の情報を記録した。未就学児のレジリエンスを育成する視点と取り組みに関するデータを引き出すために、半構造化インタビュー質問を用いた。内容妥当性については専門家 3 名のチェックを受けた。結果の平均スコアは 0.875 と、高水準の内容妥当性が確認された。インタビューの実施後、逐語記録で内容分析を行い、保育者が「レジリエンス」と「社会情動的スキル」という用語をどのように理解しているか、未就学児のレジリエンスと社会情動的スキルを育成するためにどのような取り組みを行っているかを分析するデータを作成した。

調査結果

保育者の経歴

調査参加者は 10 か所の保育施設に所属する保育者 11 名で構成され、年齢は 30～55 歳、教育経験は 5～32 年であった。保育施設のうち、6 か所は私立、4 か所は公立であり、そのうち 4 か所は異年齢合同クラスを設けていた。4 か所の公立保育園は全て 2017 年幼児カリキュラムを実施している。このうち、2 か所がヴァルドルフ＝シュタイナー教育法、1 か所が絵本ベースのアプローチおよびプロジェクト型アプローチ、残りの 1 か所がプロジェクト型アプローチのみを採用していた。私立保育園のうち 2 か所はモンテッソーリ教育法を採用しており、他の保育園はプロジェクト型アプローチ、7 つの習慣¹、実行機能(EF)コンセプト、ハイスコープ、レッジョエミリア・アプローチ、オルフ教育法、モンテッソーリ教育法、感覚統合コンセプト、ホール・ランゲージ²、仏教アプローチなど、数多くの革新的な幼児教育法を実践していた(表 1 を参照)。

¹ スティーブン・R・コヴィー著「7 つの習慣」は、個人の効果性と対人関係の効果性を高めるためのフレームワーク。これらの習慣は、自己改善を促進し、リーダーシップスキルを向上させ、協調的な取り組みを推進するように設計されている。それらは、主に 3 つのグループに分類されている: 私的成功、公的成功、再生。

² ホール・ランゲージ・アプローチ(WLA)は、フォニックスや個別のスキルを通じてではなく、意味のある文脈の中で完全な単語やフレーズの理解を重視することで、読み書きを教える教育哲学。この方法は、言語を一貫した全体として捉え、読む、書く、聞く、話す、を相互に関連したプロセスとして統合すべきだと主張している。

表 1: 保育者(インタビュー対象者)の経歴

番号	年齢	性別	教育 経験	施設 タイプ	施設の 場所	クラス編成	教育法	職位	T:C 比率
1	40	女性	7 年	私立	北東部	N-P6 (2-12 歳) 異年齢合同 3-6 歳	モンテッソーリ教育法	園長	1:25
2	36	女性	12 年	私立	東部	N-S3 2-15 歳	国家幼児教育カリキュラムとプロジェクト型アプローチ、実行機能、資質・能力ベースカリキュラム、7つの習慣、感覚統合を統合	年長 クラス担任	1:25
3	43	女性	12 年	私立	バンコク	K 2-6 年 異年齢合同 3-6 歳	国家幼児教育カリキュラムとハイスコープ、レッジョエミリア、オルフ教育法、モンテッソーリ教育法を統合	全幼児クラス(読み聞かせ、副園長)	3:25
4	55	女性	32 年	公立	バンコク	K-P6 3-12 歳	国家幼児教育カリキュラムと絵本ベース、プロジェクト型アプローチを統合	年長 クラス担任	1:25-30
5	50	女性	27 年	公立	中央部	K-P 6 4-12 歳 異年齢合同 4-6 年	国家幼児教育カリキュラムとヴァールドルフ-シュタイナー教育を統合	クラス担任	2:26
6	34	女性	13 年	私立	バンコク	K-S12 3-18 歳	国家幼児教育カリキュラムとプロジェクト型アプローチを統合	全幼児クラス (遊び、特別教師)	1:22-23
7	37	女性	5 年	私立	北東部	N-P3 (2-9 年) 異年齢合同 3-6 歳	モンテッソーリ教育法	園長	4:30
8	48	女性	14 年	公立	北東部	K-S3 4-15 歳	国家幼児教育カリキュラムとヴァールドルフ-シュタイナー教育を統合	年中 クラス担任	1:13
9	31	女性	5 年	私立	東部	N-S3 2-15 歳	国家幼児教育カリキュラムとプロジェクト型アプローチ、実行機能、能力ベースカリキュラム、7つの習慣、感覚統合を統合	体育教師 乳児から年長	1:25
10	42	女性	17 年	私立	バンコク	N-S12 2-18 歳	国家幼児教育カリキュラムとハイスコープ、レッジョエミリア、ホール・ランゲージ、実行機能、仏教を統合	年長 クラス担任	2:25
11	30	女性	7 年	公立	バンコク	K-P6 3-12 歳	国家幼児教育カリキュラムとプロジェクト型アプローチを統合	年長 クラス担任	1:30

注: N = 保育園(2歳～)、K = 幼稚園、P = 小学校、S = 中学校

社会情動的スキルとレジリエンスの認知と理解

11名の保育者全員がタイの国家幼児教育カリキュラムに記述されている「社会情動的スキル」の用語についてはよく知っていたが、うち2名は「レジリエンス」の用語を聞いたことがなかったと答えている。保育者たちは社会情動的スキルがレジリエンスに関連していると考えていた。

社会情動的スキルは非常に重要であり、可能な限り早期に育成、実践する必要がある

保育者は皆、社会情動的スキルについて、幸福で成功する人生を目指し、社会で他者とうまくやっていき、人生の目標を達成するために不可欠であると考えている。社会情動的スキルは、タイの国家幼児教育カリキュラムで言及されている「社会情動的な発達」に関連しており、非常に幼い時期から育成、実践されるべきものである。保育者のうち3名は社会情動的スキルのサブスキルとして自己理解、自己管理、他者理解、人間関係の構築、責任ある意思決定の5つの能力を挙げており、他の保育者は社会情動的スキルとして感情の認識、感情調整、感情制御、感情管理、自己のニーズの理解、注意深さ、忍耐力、自信、問題解決、共感力を挙げています。

ある保育者は、家庭で社会情動的スキルを育むには、保育者だけでなく保護者も重要な役割を担っていると述べている。

*「社会情動的スキルは人生の基礎となるものであり、急速に変化する世界において新たな環境に適応し、幸福な生活を送るために必要なもの」
保育者10(表1参照、以下同)
(2024年1月6日)*

*「社会情動的スキルはレジリエンスと関係しています。このようなスキルがないと、他人とうまく付き合えなかったり、行儀が悪かったり、不適切な判断をしたりして、グループに受け入れられず、仲間外れにされる可能性があります」
保育者11
(2024年1月7日)*

子どもが予測不能な世界に適応していくためにはレジリエンスが重要である

パンデミックの勃発後、レジリエンスという用語は幼児教育・保育(ECEC)分野で広く知られるようになってきた。保育者たちは皆、幼児期にレジリエンスを育成することは非常に重要だと答えていた。ある保育者はレジリエンスが神経科学の概念に関係していると述べている。レジリエンスは人間が障害や困難に上手に対処し、克服するために用いるスキルであり、個人の性質と環境保護要因という2つの要素で機能する。大人が子どものレジリエンスを育成する適切な環境を提供することが非常に重要となる。ただし、レジリエンス自体は柔軟性があり、生涯を通じて良くも悪くもなる可能性がある。また、回復する力だけでなく前進する力も備える。すな

わち、困難を克服した後、次の段階に進み、あらゆる問題に直面することにより、さらに強くなっていく。

「レジリエンスは、私たちが失敗や失望、ネガティブな状況に長い間とらわれぬように手助けするものです。凝り固まった考え方ではなく、柔軟に考える力、そして、困難を乗り越える力を与えてくれます」

保育者3
(2023 年 12 月 29 日)

「現在の予測不能な世界では、子どものレジリエンスを育むことが非常に重要になります。子どもたちが将来、予測不能な世界に適応できるようになるためには、かなり幼い頃からこのスキルを教えることが大切です」

保育者1
(2023 年 12 月 19 日)

レジリエンスの高い子どもは幸福で明るく、好感がもて、平和的である。友達や大人から愛され、受け入れられている。リスクを恐れず、自主性、独立心、自尊心、自己肯定感をもっており、神経質になりすぎず、無力感ですぐに泣いたりもしない。さらに、自分の考えを他者に伝え、愛と思いやりを他者に示し、自分自身で問題を解決する力をもっている。

「レジリエンスが高い子どもは、柔軟で楽観的に考え、明るく好感がもて、どんな困難や問題にも敏感に反応しすぎず、問題を解決することができます」

保育者8
(2023 年 12 月 20 日)

未就学児のレジリエンスを育成するための取り組み

レジリエンスを育成する取り組みは、物理的環境、学びの活動、保育者の指導という 3 つの側面で構成される。

1) 物理的環境: 4 名の保育者は、4～6 歳児の社会情動的スキルとレジリエンスを育成する取り組みとして、子どもを落ち着かせるためのピースコーナー (peace corner) を設けるなど、物理的環境に配慮していると答えている。ピースコーナーには、座り心地のいいビーズクッション、本、花、さらにはエッセンシャルオイルのボトルなどを配置している。また、モンテッソーリ教育とヴァルドルフ＝シュタイナー教育の 2 つの教育アプローチでは、芸術的な環境や家庭的な環境について言及していた。

「モンテッソーリ教育法では、平和のための教育という究極の目標があるため、レジリエンスの育成が支持されています。ピースコーナーは、喧嘩している子どもたちを落ち着かせるためにビーズクッションなどを置いた居心地の良い環境です…」

保育者 4

(2023 年 12 月 19 日)

「…異年齢合同グループの子どもたちのために、清潔で整然とした芸術的な環境や家庭的な環境を設けています…」

保育者 2

(2023 年 12 月 29 日)

ある保育者は、「社会性と情動の学習 (SEL)」の概念を取り入れ、通常より 2 倍の広さのプレイルーム室を設けていると答えていた。ここでは、気持ちを落ち着かせる場所、(身近にある素材を使う) ルースパーツ遊び、小さなジム、ごっこ遊びのために 4 つのコーナーが用意されており、各教室で毎月テーマを決め、週に 1 回 50 分のセッションを行っている。また、落ち着いた雰囲気を演出するために自然環境音の BGM も流している。

「私たちの園は、「社会性と情動の学習 (SEL)」の概念を取り入れたプレイルーム (クリエイティブルーム) を設けています。この部屋は保育室の 2 倍の広さがあり、4 つのコーナーには、気持ちを落ち着かせる場所、ルースパーツ遊び、ボールプールがある小さなジム、ごっこ遊びができる場所を設けています」

保育者 3

(2023 年 12 月 26 日)

2) 学びの活動:モンテッソーリ教育を実践している保育園から来た 2 名の保育者は、モンテッソーリ教育の活動自体が社会情動的スキルとレジリエンスを育成すると述べている。例えば、日常生活、フラワーアレンジメント、礼儀と作法の練習などが挙げられる。

「…モンテッソーリ教育の活動は社会情動的発達を促すものです。異年齢合同クラスでは 4 つの実習を行っています。そのうちの 1 つである「日常生活」では、子どもたちが人として独立して生きていけるように、自分自身の面倒をみることを学びます」

保育者 11

(2023 年 12 月 28 日)

ヴァルドルフ＝シュタイナー教育については、2 名の保育者が「自由遊びは保育者の介入を受けずに子どもたちが社会情動的スキルとレジリエンスを実践する最良の機会」と答えていた。他の 2 名の保育者も、自由遊びはこれら全てのスキルを育成するための最適な活動であると述べている。自由遊びを 1 人で、ペアを組んで、少人数のグループで、あるいはクラス全員で行うことにより、社会情動的スキルを実践する機会が得られる。また、異なる私立幼稚園から来ている 2 名の保育者は、全ての園児と一緒に遊ぶ「自由デー」を設けていると答えている。その日は、保育者が複数の遊びコーナーや遊び場を設け、いろいろなクラスの子どもたちが一緒に遊んだり、別の教室で何をするかを決めたりすることができる。さらに、1 人の保育者

は、子どもたちがタスクに対する感情(怒り、喜び、中立状態など)やパフォーマンスを評価するために使用する自己評価ワークシートについて言及していた。

「私たちの園では毎週金曜日を「自由デー」と決め、別の教室で半日何をしたいかを子どもたちに決めさせています」

保育者 9

(2024 年 1 月 6 日)

「自由デーには、全ての園児が、おやつ時間も含め、半日一緒に遊びます。保育者は子どもたちのために遊び場を企画します。子どもたちはどの学びの場³に参加するかを計画し、一日の終わりに自分のパフォーマンスを振り返ります…」

保育者 6

(2023 年 12 月 21 日)

社会情動的スキルを育成する芸術的活動については、音楽、運動、美術工芸、料理、ボードゲーム、タイの伝統的なゲームなどが挙げられた。全ての活動は、個人、ペア、小グループ、クラス全体で行われていた。

「私は社会情動的スキルに関連のある物語を用い、色に応じて感情を表現するツールとしてアートを提供しています…」

保育者 10

(2024 年 1 月 7 日)

感情の認識に関する手法としては、感情カードを使った感情のチェックイン・チェックアウト(保育者 6 名)や、読み聞かせの後に話し合うこと(保育者 4 名)などが挙げられた。1 人の保育者は、1 日を始める前に 30 分間のマインドフルネス・トレーニングをブレイン・ジム・エクササイズ(身体の正中線を横切る身体運動に関連した 5～10 分間の活動で、子どもたちが学びの準備をする手助けとなる)と共に実行していると述べた。別の保育者は、1 日の終わりに感情日記(子どもたちがその日の気持ちを反映して絵を描いたり、色を塗ったりできる)を用いてその日の感情を振り返り、計画・実行・評価ステップにより子どもたちの考えを共有できるようにしていると答えている。また、同じ私立保育園に所属する保育者 2 名は、1 日を通して実践している日常的なルーティンを挙げている。この保育園は、「7 つの習慣」(前向きに行動すること、終わりを念頭に置いて始めること、大事なことを優先することなど、子どもが潜在能力を最大限に発揮できるようにするための原則と習慣)と実行機能(学びに用いる脳のスキル、すなわち、作業記憶、抑制機能、認識柔軟性、注意力)を実践している施設である。

「…私は毎朝、ホームルームで子どもたちをペアで組ませて感情を共有させる感情チェックから始めています。そして一日の終わりには、感情日記を使って子どもたちがその日に感じたことを振り返ります。また、計画・実行・

³「学びの場」は、子どもたちが独立した自主的な学習活動に取り組むために教室内に設けた独立式のセクションである。

評価ステップも活用し、毎週 5 人の子どもに自分の作業や障害に対する考えや気持ちを共有してもらいます。どのように問題を乗り越えたか、何を誇りに思っているか、それはなぜか、といった質問を行い、さらに 1 人の子どもを選び、その経験をクラス全員で考えてもらいます」
保育者 9
(2024 年 1 月 6 日)

「私たちは 7 つの習慣と実行機能の概念を教育と学びに取り入れています。7 つの習慣の目的は、日常生活を幸福に過ごすことです。まず、個人的なことから始めます。前向きになり、自己を制御し、選択を行い、結果に責任をもつことです。そうすることにより、子どもたちが自分の感情を認識し、自分の意思決定や保育者の促しに従って反応したり表現したりするのに役立ちます」
保育者 8
(2023 年 12 月 20 日)

「私たちは子どもたちに積極的になること(習慣 1)、選択すること、そして自分の決定に責任をもつことを教えています。子どもたちは、何をすべきか、どのように改善すべきかを指示されることなく、保育者のフィードバックを振り返り、そこから学ぶ方法を教わります。7 つの習慣では、幼児クラスから基礎として学び始め、5 歳から共有の概念を学びます。習慣 1 から 3 は、いわゆる「私的成功(private victory と)の基礎であり、習慣 4 から 6 は「公的成功(public victory)としてグループ化されています⁴」
保 育 者 1
(2023 年 12 月 29 日)

私立保育園所属の保育者 1 名は、子どもたちが掃除や食卓の準備などで思いやりや責任感をもつことを体験できるように、日常的なボランティアスケジュールを立てていると述べていた。

3) 保育者の指導:モンテッソーリ教育を実施している保育園に所属する保育者 2 名は、モンテッソーリ教育法が社会情動的スキルやレジリエンスの育成を支えていると述べている。例えば、子どもが自分自身、他人、そして環境を尊重できるように、前向きな規律と模範を示すなどである。さらに異年齢合同クラスでは、子どもの共感力を育成するだけでなく、子ども一人ひとりの能力に応じてタスクの困難を反映させたモンテッソーリ教育の作業ステップ、すなわちタスクを選択し、取り組み、繰り返すことを行わせている。保育者は、子どもたちのニーズと困難に応じてタスクを割り当て、子どもたちが自分でタスクの難しさを乗り越えていけるようにしている。

⁴ 私的成功: 個人の熟達を強調し、望ましい結果を定義し、成功のための内的な基盤を築くことに努力を集中させる。公的成功: 他者との協力とシナジーを育み、一人では成し遂げられないことを共に達成できる強い関係を構築する。

「モンテッソーリ教育法は、いわゆる共感力に基づき、年長の子どもが年少の子どもを手助けする異年齢合同クラス概念を通じてレジリエンスの育成を促しています。また、選択、作業、繰り返しという手順に従って作業することは、子どもたちがそれぞれのタスクを達成するのに助けとなります。これは個人に合わせた授業計画のようなものです…」保育者 11
(2023 年 12 月 28 日)

保育者たちが述べているように、レジリエンスを育成するために直接的および間接的な指導が用いられている。直接的な指導では、子ども一人ひとりの違いに応じて、年齢に適した難しさの最適なタスクを割り当てる。また、それぞれの感情の呼び方、感情や怒りを管理する方法も教えている。その他の手法—もめごとの解決、計画・実行・評価、前向きなコミュニケーションなど—は、原因と結果を理解するのに役立つ。間接的な指導では、保育者が模範となること、進行役やガイドを務めること、愛情、思いやり、慰めを示すことなどが挙げられる。保育者たちは常にオープンクエスチョンを投げかけ、子どもたちが自分自身で解決策を見つけられるように手助けする。さらに保育者たちは、バディ制度(保育者 1 名)、保育者のフィードバック(保育者 5 名)、クラスのルールづくり(保育者 3 名)についても言及している。

「私は間接的および直接的な指導法を使ってレジリエンスを育むようにしています。簡単ではないが難しすぎることないように、やりがいのあるタスクを選んで子どもたちに挑戦させています。それぞれの感情の呼び方や怒りを管理する方法も教えています。子ども一人ひとりの違いを認識し、愛情と思いやりを示し、子どもたちを比較することを避けています。さらに、感情カードを使ったハイスコープアプローチに従ってもめごとの解決のテクニックを活用しています」
保育者 5
(2023 年 12 月 21 日)

「私は年齢に応じたタスクを選ぶことにより、全ての子どもが達成できるように努めています。子どもたちの発達状況や年齢に応じてタスクを割り当てています」
保育者 4
(2023 年 12 月 21 日)

「私はバディ制度を用いて、子どもたちが互いに思いやりをもち、仲良くなるようにしています」
保育者 10
(2024 年 1 月 7 日)

結論および考察

タイの保育者たちは、「レジリエンス」の用語よりも、国家カリキュラムに記述されている「社会情動的スキル」の用語の方をよく知っていた。コロナ禍の後、タイの子どもたちはソーシャルディスタンス政策の影響を受けた。保健システム研究所(HSRI)の2017年報告書によると、2〜7歳児の30%に実行機能の遅れが見られることが明らかになった。そのため、タイの教育委員会事務局は、児童のウェルビーイングと幸福を取り戻し、失われた学びを回復させるために、「3つの促進、3つの削減、3つの増加」という新たなキャンペーンを最近公表した。

タイの2017年国家幼児教育カリキュラムには社会情動的発達の望ましい特性が提示されている。例えば、健全なメンタルヘルスをもち幸福であること、芸術的な活動を通して感情を表現できること、健全な感情と道徳性を見せていること、他者と上手く付き合えること、立憲君主制のもと民主社会の良き一員であること、などが挙げられる(タイ教育省、2017)。これらの資質は、タイ教育省の2020年計画で追加された幼児の資質、すなわち自己教育と実行機能に対応している。望ましい学習成果として、自己肯定感、自信、自己効力感、自己抑制が指摘されている(教育省 360、2024)。

そのため、インタビューを受けた保育者たちは皆、社会情動的な発達に関連するスキルやレジリエンスを重要視していた。これらのスキルは将来の成功と幸福な人生の礎となるからである。さらに保育者たちは自分が立ち直った直接的な過去の経験も持ち合わせている。MastenとBarnes(2018)によると、レジリエンスとは非常に幼い頃から育む必要がある重要な心理状態である。レジリエンスは子どもたちを嫌な経験から守り、将来傷つかないようにするための保護要因となり得る。従って、大人は幼い子どもたちにこうしたスキルを実践する機会を提供し、子どもたちが自分自身で困難に立ち向かい、克服できるようにする必要がある(Hurley、2020)。

タイの保育者たちが社会情動的スキルを育成するために行っている取り組みや活動として、1) 自由遊びに重点を置いた居心地が良く温かい家庭的な環境や広い保育室を子どもたちに提供すること、2) アート、音楽、運動、料理、読み聞かせ、マインドフルネス・トレーニング、タイの伝統的なゲームやボードゲームなどの芸術的活動を行うことにより、感情を認識し、表現する力を育むこと、3) 感情を認識し制御するやり方の模範を示す、前向きな規律、クラスのルールづくり、年齢や能力に応じたタスクの割り当てなど、保育者による指導を行うことが挙げられる。PengpingとKhayankij(2022)が述べているように、タイの保育者による社会情動的スキルを育成する取り組みは、子どものレジリエンスを育む保育者の役割に関連している。子どものレジリエンスを育む上で保育者が担う重要な役割は2つあり、学習環境に配慮することと経験を提供することが挙げられる。

Ernstら(2018)が述べているように、レジリエンスは動的で状況依存性や可鍛性という性質をもつ。レジリエンスの性質、すなわち、リスクを恐れず、好奇心をもち、勇敢であり、自信があり、自己認識力が高いなど、レジリエンスの高い子どもを育むには、大人が子どもたちにさまざまな困難やタスクを与え、自分で解決または克服する方法を学ばせる必要がある。従って、子どもが主導する活動である自由遊び、特にルースパーツを用いた遊びなどは、自己抑制を促進するため、レジリエンスを高める最適な方法と思われる(D'Silva、2021)。

McDonaldら(2019)は、子どものレジリエンスの育成における親の役割と要因を認識できるように、保護者たちを教育すべきであるという考えを支持している。子どものレジリエンスは親の影響のみではなく、家族、学校、地域社会など複数の要因によって影響を受ける。このことは、タイの保育者がインタビューで、「保護者が子どものレジリエンスの保護要因を確立するための協力者」と述べていたことでも明らかである。

本研究の限界

本研究では、少数の保育者を対象に詳細なインタビューを行った。しかし、調査参加者たちは公立保育園で働く者と私立保育園で働く者がおり、それぞれに異なる教育アプローチがあり、異なるタイの地域に住んでいる。今後の研究では、地方、都市部、農村部など、より広い地域を対象に、保護者と保育者のレジリエンスに対する視点を調べることが望まれる。さらに、社会情動的スキルとレジリエンスの重要性と実践に関し、保育者の専門能力の開発と保護者の教育を実施することにより、双方の知識と理解を深めることも望まれる。

References

- Cohn, M. A., Fredrickson, B. L., Brown, S. L., Mikels, J. A., & Conway, A. M. (2009). Happiness unpacked: Positive emotions increase life satisfaction by building resilience. *Emotion*, 9(3), 361–368. <https://doi.org/10.1037/a0015952>
- D'Silva, P. (2021). Sailing the 7Cs: Exploring loose parts as anchors to nurture resilience. *He Kupu The Word*, 6(4), 12-19. <https://www.hekupu.ac.nz/sites/default/files/2021-05/04%20D%27Silva.pdf>
- Ernst, J., Johnson, M., & Burcak, F. (2018). The nature and nurture of resilience: Exploring the impact of nature preschools on young children's protective factors. *The International of Early Childhood Environmental Education*, 6(2), 7. <https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ1225648.pdf>
- Fenwick-Smith, A., Dahlberg, E. E., & Thompson, S. C. (2018). Systematic review of resilience-enhancing, universal, primary school-based mental health promotion programs. *BMC Psychology*, 6(1). <https://doi.org/10.1186/s40359-018-0242-3>
- Las Hayas, C., Izco-Basurko, I., Fullaondo, A., Gabrielli, S., Zwiefka, A., Hjemdal, O., Gudmundsdottir, D. G., Knoop, H. H., Olafsdottir, A. S., Donisi, V., Carbone, S., Rizzi, S., Mazur, I., Krolicka-Deregowska, A., Morote, R., Anyan, F., Ledertoug, M. M., Tange, N., Kaldalons, I., Jonsdottir, B.J., González-Pinto, A., Vergara, I., González, N., Mar Medina, J., de Manuel, K. E. (2019). UPRIGHT, a resilience-based intervention to promote mental well-being in schools: study rationale and methodology for a European randomized controlled trial. *BMC Public Health*, 19(1), Article 1413. <https://doi.org/10.1186/s12889-019-7759-0>
- McDonald, M., McCormack, D., Avdagic, E., Hayes, L., Phan, T., & Dakin, P. (2019). Understanding resilience: Similarities and differences in the perceptions of children, parents and practitioners. *Children and Youth Service Review*, 99, April 2019, 270-278. <https://doi.org/10.1016/j.childyouth.2019.01.016>
- Ministry of Education Thailand. (2017). Early childhood education curriculum B.E. 2560 (A.D. 2017). Arksornthai printing.
- Miljević-Ridički, R., Plantak, K., & Bouillet, D. (2017). Resilience in preschool children-The perspectives of teachers, parents and children. *International Journal of Emotional Education*, 9(2), 31-43. https://www.researchgate.net/publication/321700549_Resilience_in_Preschool_Children_-_The_Perspectives_of_Teachers_Parents_and_Children
- Ministry of Education. (2020, September 23). *Policy on education and learning for early childhood children*. <https://moe360.blog/2020/09/23/early-childhood/>
- Ministry of Education. (2024, May 20). *Launching the policy “3 reduce, 3 increase, 3 promote” to nurturing young children* [Facebook page]. Facebook.

<https://www.facebook.com/photo.php?fbid=842325524605365&id=100064837742730&set=a.635540608617192>

Office of the Education Council [OEC]. (2021). *Early childhood development plan B.E.2564-2570*. <https://backoffice.onec.go.th/uploads/Book/1903-file.pdf>

Office of the Education Council [OEC]. (2022). *Measures to recover learning loss in Thailand*. <https://backoffice.onec.go.th/uploads/Book/1943-file.pdf>

Pengping, A., & Khayankij, S. (2022). Teachers' roles in promoting preschoolers' resilience in schools of the Bangkok Metropolitan Region. *Humanities, Arts and Social Sciences Studies*, 22(1), 207-216.

Pinto, T. M., Laurence, P. G., Macedo, C. R., & Macedo, E. C. (2021). Resilience program for children and adolescents: A systematic review and meta-analysis. *Frontiers in Psychology*, 12, 754115. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.754115>

Phromkat, P. (2023). Learning skills social and emotional learning; SEL. *Journal of Management and Local Innovation*, 5(2), 37-54. <https://so06.tci-thaijo.org/index.php/jmli/article/view/260664/176288>

Pokam, N. (2020). Executive functions for early childhood. *Academic Journal of Makamakut Buddhist University Roi Et Campus*, 9(2), 707-721.

Ungar, M. (2022, April 22). *What resilience is and isn't – 9 things children need*. RootsofEmpathy. <https://youtu.be/7tWXHhPI5lo?si=5QKz3byaRfXK9ycb>

Yoleri, S. (2020). Factors affecting level of children resilience and teachers' opinions about resilience. *International Journal of Assessment Tools in Education*, 7(3), 361-378. <https://dergipark.org.tr/tr/pub/ijate/issue/56368/780247>